

軍艦島(端島)

長崎県長崎市

洋上から見る姿は、コンクリートの船だった。中央に切り立つ岩山があるため、その形状は異名のおり軍艦だ。正式名称は「端島」。外周約1.2kmの小さな島である。近づくと、高層住宅群の遺構が並ぶ。日本の最先端技術だった鉄筋コンクリートで造られており、30号棟は日本初のRC造高層集合住宅(地下1階、地上7階建て)で、1916年に竣工している。

軍艦島は明治から昭和にかけて、島の真下にある良質な海底炭坑で栄え、日本の近代化や、高度経済成長に大きくかかわってきた。1960年には5,200人を超える過去最高の人口を抱え、東京都を上回り、当時世界一の人口密度を有していた。生活は必ずしも楽とは言えなかったようだが、30棟あまりのRC造高層住宅が林立し、更に病院、学校、市場、映画館、遊戯場などを揃え、島のなかで都市機能がほぼ完結していた。移動には階段と集合住宅各棟を結ぶ渡り廊下が島中に網の目のように張り巡らされており、通路として合理的に機能していた。1957年には6,500mの世界最長の海底水道管が敷設され、一日約1,000tの生活用水の供給が可能となった。まさに、海上産業都市だったのである。

1960年代に入り、石炭から石油へのエネルギー革命の推進に伴って採炭量も減少し、1974年には閉山し無人島となった。日本が世界有数の経済大国に上り詰める過程で歩んできた軌跡、そして活気にあふれた昭和時代の証を現代に遺す。「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとして、2015年にはユネスコの世界文化遺産に登録され、日本だけではなく世界の人々を魅了する歴史的遺構となり、観光地として多くの人が訪れている。



いくつか残されているセピア色の写真からは、活況を呈していた島の生活の匂い、賑わいなどが伝わってくる。高層住宅と高層住宅の間に設けられた急勾配の「地獄段」と呼ばれる階段は、通勤通学路、生活道路として全住民が使うなど、濃密なコミュニティ・都市空間が形成されていた。高度経済成長を支えた生活の縮図がここにあった(写真提供：(一社)長崎県観光連盟)

